新制實業國文法

吉澤義則 著

42519
教科書文庫
4
815
44-1938
20000
73167

資料室

教科書文庫
4
815
44-1938
2000073167

吉澤義則著

新制實業國文法

文部省檢定濟
昭和十三年八月二十六日

中等學校教科書株式會社

広島大学
教
73167
図書

広島大学図書
2000073167

4c
815
昭13

例言

一本書は昭和十二年三月布令の新教授要目に準據して、實業學校に於ける國文法教科書に充てるために編纂したものであります。

一本書は國語法を基礎とし、且、實業學校の特性に鑑み、其の上級に於いて行はれる書簡文教授との聯絡を考慮して、書簡體を加味した文語法をも說いてあります。

一つとめて煩瑣な理論を避けて平易簡明な說明を與へ、例題幷に練習問題はなるべく小學校國定教科書の中から採つて、小學校との聯絡をはかり、かねて生徒の興味を喚起し、且、例題に於ては同意味の口語・文語を相對比する事によつて、知識を確實にすることにつ

とめました。

昭和十三年五月

著者識す

目次

品詞篇（上）

第一章　單語・文・品詞……一
第二章　名　詞……三
第三章　數　詞……五
第四章　代名詞……七
第五章　動　詞……一一
第六章　形容詞……一三
第七章　副　詞……一四
第八章　接續詞……一六

第九章　感動詞……一八
第十章　助動詞……一九
第十一章　助詞……二三

品詞篇（下）

第一章　口語動詞の活用……二四
一　口語動詞の活用形……二四
二　口語動詞の活用の種類……二六
三　口語動詞活用の識別法……三〇
四　口語動詞活用の假名遣識別法……三一
第二章　文語動詞の活用……三三
一　文語動詞の活用形……三三
二　文語動詞の活用の種類……三五

三　文語動詞活用の識別法……四五
第三章　形容詞の活用……四八
一　口語形容詞の活用……四八
二　文語形容詞の活用……五〇
第四章　音便……五三
第五章　口語助動詞の種類及び活用……五七
第六章　文語助動詞の種類及び活用……六七
第七章　助動詞の接續……七九
一　口語助動詞の接續……七九
二　文語助動詞の接續……八三
第八章　助詞の種類及び係結の法則……八九
一　助詞の種類……八九

二　係結の法則……九七
第九章　接頭語・接尾語……九九
第十章　品詞の轉成……一〇〇

文　章　篇

第一章　文の成分……一〇三
第二章　文の成分の位置と省略……一〇九
第三章　句……一一三
第四章　文の構造上の種類……一一三
第五章　文の性質上の種類……一一五
（別記）書簡體と敬語……一一八

附　錄

文法上許容ニ關スル事項……一二五

表

第一表　口語動詞活用表
　　文語動詞活用表
第二表　口語形容詞活用表
　　文語形容詞活用表
第三表　助動詞活用表

目次終

新制實業國文法

文學博士　吉澤義則著

品詞篇（上）

第一章　單語・文・品詞

（口語）

一　花が咲き、鳥が鳴く。

二　中佐はなほ奮戰を續けた。

（文語）

花咲き、鳥鳴く。

中佐はなほ奮戰を續けたり。

右の例で、傍線の引いてある一つ〳〵の語は、皆それ〴〵ある意

味をもつてゐる。かやうにある意味をもつてゐる一つ〳〵の語を**單語**といふ。さうして右の例のやうに、いくつかの單語が集まつて、あるまとまつた思想或は感情を表はしてゐるものを**文**といふ。

單語

文

文には談話の儘を表はす**口語**と、筆記だけにしか用ひない**文語**とがある。

口語
文語

我々がこの口語なり、或は文語によつて、自分の考を他人に傳へるには單語の一定の組立てによらなければ、正しく傳へることが出來ない。その一定の組立ての法則を**文法**といふ。

文法

單語をその形態・意義・職能の上から左の十種に分ける。その各、を**品詞**といふ。

品詞

名詞　數詞　代名詞　動詞　形容詞　副詞　接續詞

感動詞　助動詞　助詞

第二章　名詞

（口語）

一　楠正成は忠臣である。

二　今年の暑さは格別です。

（文語）

楠正成は忠臣なり。

今年の暑さは格別にて候。

右の例で、傍線の引いてある語は、いづれも事物の名をあらはしてゐる。かゝる語を**名詞**といふ。

名詞

名詞のうち「楠正成」のやうに一つの事物に限つて用ひられるものを**固有名詞**といひ、「忠臣」「今年」「暑さ」のやうに同種類の何れの事物にも通じて用ひられるものを**普通名詞**といふ。

固有名詞
普通名詞

練習一

練習

次の文中から名詞を拔き出せ。

(一) 調子のよい蜜柑採の歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはせてのどかに聞えてくる。

(二) 秀吉の援軍が今日來るか明日來るか、それを賴みに勝久は城を守つた。

(三) 昔は個人の利益を營むのが商業であると思はれてゐた。それ故大多數の商人は、自己の利益を除いては、殆ど何物をも眼中に置かず、忍耐も努力も要するに皆自己の爲であつた。

(四) 暮色は東山をこめ、叡山をめぐり、やう〳〵鴨川に襲ひ來れり。(文語)

(五) 毎晩賣上高の勘定を致す時など仲間のうちにて計算は私が一番達者なりとて、何時もほめられ申候。(文語)

第三章　數詞

(口語)

一　それから二日間、二人は機の修繕に一所けんめいでした。

二　第十號は一番で合格した。

三　一ダース拾錢の割で賣りました。

(文語)

それより二日間、二人は機の修繕に一所けんめいなりき。

第十號は一番にて合格せり。

一ダース拾錢の割を以て賣り申し候。

右の例で、二日間・二人・一ダース・拾錢は事物の數量をあらはし、第十號・一番は事物の順序をあらはしてゐる。かやうに事物の數

數詞

練習二

量又は順序をあらはす語を數詞といふ。

練習

次の文中から數詞を拔き出せ。

(一) 永祿十二年六月の或夜、勝久を奉ずる尼子勢は出雲に入り、一城を築いて三度ときの聲を作つた。

(二) 寒い冬の日でも、一日に一度は、必ず北斗を連れて運動に出かけました。

(三) 「一體幾らで渡す。」「お二人で八百文下さい。」

(四) ぽつと一息つく折から、飛來る一彈、又も中佐の胸を貫ぬき、軍曹の胸をも貫ぬく。二人は一度に打倒されて氣を失へり。（文語）

(五) 二週間ばかり前よりサンパウロ市に參り居り候。コーヒー園には多くの日本人が働き居り候。中にも十三四ばかりの子供がかひ〴〵しく立働ける樣を見ては、如何にもけなげに存ぜられ候。（文語）

代名詞

第四章　代名詞

（口語）

一　私は無事に暮してゐます。

二　彼はそれを知つてゐる。

三　ここはどこですか。

四　あちらこちらを探し求めた。

（文語）

小生無事消光罷り在り候。

彼はそれを知れり。

ここはいづこなりや。

かなたこなたを探し求めぬ。

右の例で、傍線の引いてある語は、皆名詞の代りに用ひられてゐる。かゝる語を代名詞といふ。

又、右の例の中で、私・小生・彼は人の名の代りに用ひられてゐるも

人代名詞

指示代名詞

ので、これを**人代名詞**といひ、それ・ここ・どこ・いづこ・あちら・こちら・かなた・こなたは事物・場所・方向を指し示してゐるもので、これを**指示代名詞**といふ。

人代名詞

分類	自稱	對稱	他稱	不定稱
口語	わたくし わたし 僕	あなた 君 おまへ	このかた そのかた あのかた これ あれ 彼	どのかた どなた だれ
文語	我 僕 予 わらは（女）	君 汝 そなた そち	彼 あれ	たれ なにがし

書簡（文）	小生 愚生 拙者 私儀 私事	貴殿 貴君 貴下 そなた そもじ
		彼 あれ
		たれ なにがし

指示代名詞

分類			事物	場所
近稱	口語		こ これ	ここ
	文語		こ これ	ここ
中稱	口語		そ それ	そこ
	文語		そ それ	そこ
遠稱	口語		あ あれ	あそこ あすこ
	文語		あ あれ かれ	あそこ かしこ
不定稱	口語		ど どれ なに	どこ
	文語		いづれ なに	いづこ いづく

方向	こつち	こ	ち	そつち	そ	ち	あつち
こちら	こなた	そちら	そなた	あちら	あなた かなた	どつち	いづち
						どちら	いづかた

以上説明した名詞・數詞・代名詞を總稱して體言といふ。

練習

次の文中から代名詞を拔き出せ。

(一) そこの木のかげ、ここの石のそばに赤い花が咲いてゐる。

(二) 君はそれとこれとどつちがすきか。どれでも君のすきな方をあげよう。

(三) あれは僕の作つた曲だ。

(四) 其の壯觀實に筆舌に盡くし難し。(文語)

(五) いづれを擇ばるゝや貴殿の御好にお委せ申すべく候。(文語)

第五章　動詞

(口語)

一　庭に櫻の木がある。

二　心に欲しいと思ふだけで空しく家に歸つた。

三　花が笑ひ鳥が歌ふ時候となりました。

(文語)

庭に櫻の木あり。

心に欲しと思ふのみにて、空しく家に歸りぬ。

花笑ひ鳥歌ふ候と相成り候。

右の例で、思ふ・歸つ・歸り・笑ひ・歌ふ・なり・相成りは事物の動作を、ある・ありは存在をあらはしてゐる。かやうに事物の動作や存在をあらはす語を動詞といふ。

練習四

練習

次の文中から動詞を抜き出せ。

(一) 山といふものを空中から見下すと、意外にはげた場所の多いのに驚く。

(二) 副長もはや上甲板にあらはれて、今日の天氣はどうかと空を眺める。

(三) 三日二晩走り續けて、三十一日の夜、シカゴに着きました。

(四) 人は孤立して單獨に生活し得るものにあらず。一の社會をなして共同生活を營むにあらざれば、その安寧と幸福とは得て望むべからず。(文語)

第六章　形容詞

(口語)	(文語)
一　夏は暑く、冬は寒い。	夏は暑く、冬は寒し。
二　言ふことは易いが、行ふことは難しい。	言ふは易く、行ふは難し。

形容詞
用言

練習五

右の例で、傍線の引いてある語は事物の性質をあらはしてゐる。かやうに事物の性質をあらはす語で、言ひ切る時の終が、口語ならばい、文語ならばしとなるものを形容詞といふ。

以上説明した動詞・形容詞を總稱して用言といふ。

練習

次の文中から形容詞を抜き出せ。

(一) 暗い寒い冬から明るい暖い春に移ります。

(二) 莖は、赤のこいのや、うすいのや、又うす綠のがあります。

(三) 下草の茂りはあまり深くないので、所々に地面の赤い色さへあらはれてゐる。

(四) 義は泰山よりも重く、命は鴻毛よりも輕し。(文語)

(五) 甚だ心苦しき事にて候へど何卒宜しく御願ひ申上候。(文語)

第七章　副　詞

(口　語)	(文　語)
一　それではすつかり張りかへなさい。	さらばことゞく張りかへ給へ。
二　まことに喜ばしう存じます。	まことに喜ばしく存じ候。

右の例ですつかり・ことゞくは動詞張りかへ、まことには形容詞喜ばしう・喜ばしくの意義を、それゞ限定してゐる。かやうに動詞や形容詞の意義を限定する語を副詞といふ。

(口　語)	(文　語)
三　山地はなほしばらく續いた。	山地はなほしばらく續きぬ。

右の例で、なほは副詞しばらくの意義を限定してゐる。かやうに副詞はまた他の副詞に添うてその意義を限定することもある。

練習六

練　習

一　左の文中の副詞を指摘(つまみだ)し、且つその副詞がいづれの語の意味を限定してゐるかを説明せよ。

(一)　さえたはさみの音がちよきん〳〵と聞えて來る。

(二)　まるで地獄で佛にあつた心地がする。

(三)　二人は戸外にたたずんで、しばらく耳をすましてゐたが、やがてピアノの音がはたと止んだ。

(四)　其の後とかく病勢衰へず、遂に肺炎を引起し申候。(文語)

二　次の副詞を用ひて口語の短文を作れ。

たちまち。甚だ。殆ど。靜かに。よほど。きつと。

第八章　接續詞

(口語)	(文語)
一　努力した。さうして成功した。	努力せり。而して成功せり。
二　風がひどい。だから僕は行かない。	風甚し。されば我行かず。
三　明日又は明後日に御邪魔致します。	明日若しくは明後日御邪魔可仕候。

右の例で、さうして・而して・だから・されば・又は・若しくは・は上下の語句・文章を接續するために用ひられてゐる。かゝる語を接續詞といふ。

練習七

練習

一　次の文中から接續詞を拔き出せ。

(一)　尼子方は多く戰死し、それに糧食がとう〳〵盡きてしまつた。

(二)　僕はつらい氣がします。けれども、北斗は、きつと軍馬に買上げられるに違ひありません。

(三)　彌次郎も北八も、珍しさうに眺めてゐました。すると、一人の大原女が彌次郎のそばへ寄つて來ました。

(四)　諸車の通行を禁ず。但し郵便車はこの限にあらず。(文語)

(五)　商人の眞の自覺は、卽ち國家經濟の前途を決定する所に御座候。(文語)

二　次の接續詞を用ひて短文を作れ。

しかし。それとも。すると。ところが。けれども。(口語)

及び。又。或は。されど。しかも。(文語)

第九章　感動詞

感動詞

練習八

（口語）

一　あゝ立派な馬。誰の馬か。

二　さあ、一緒に行かう。

三　いゝえ、行きません。

（文語）

あつぱれ名馬。誰の馬ぞ。

いざ、諸共に行かん。

いな、我は行かず。

右の例で、あゝ・あつぱれ・さあ・いざ・いゝえ・いなは、いづれも感動・呼掛・應答の際に發する語である。かゝる語を感動詞といふ。

練習

一　次の文中から感動詞を拔き出せ。

(一)　や、まけるのか。情ない事を言ふ。

(二)　はい、承知しました。

(三)　やれ打つなはへが手をする足をする。

(四)　すはや宮には御自害ぞ。（文語）

二　次の感動詞を用ひて口語の短文を作れ。

おつと。おや。はて。まあ。おい。もし。いゝえ。はい。あら。

第十章　助動詞

（口語）

一　今は逃げることも出來ない。

二　狐が一匹、目の前に走り出た。

（文語）

今は逃ぐることもかなはず。

狐一匹、目の前に走り出でたり。

助動詞

右の例でない・ず・た・たりは何れも動詞に添うて其の意義を助けてゐる。かゝる語を助動詞といふ。

（口語）	（文語）
一　怒濤が山のやうだ。	怒濤山の如し。
二　優勝者は彼です。	優勝者は彼なり。
三　文法の時間は五時間目だ。	文法の時間は五時間目なり。
四　御志が有難いのです。	御志の忝きなり。

右の如く助動詞は名詞・代名詞・數詞・形容詞に添ふものもある。

（口語）	（文語）
一　若い人に知らせようとして、かうするのだ。	若き人に知らせんとて、かくするなり。

右のよう、んの如く助動詞は又他の助動詞に添ふこともある。

練習九

練習

一　次の文中から助動詞を抜き出せ。

(一)　空中を飛行することに成功したのは、これが始めてだといはれてゐます。

(二)　天皇が之を裁可せられ、公布せしめられると、始めて法律が出來上るのである。

(三)　湖水と思はれる邊は、雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色だ。

(四)　これ程恐しかりしことなかりき。（文語）

(五)　計算は私が一番達者なりとて、何時もほめられ申候。（文語）

二　次の助動詞を用ひて口語の短文を作れ。

たい。　まい。　ない。　せる。　させる。　ぬ。

第十一章　助　詞

（口　語）

一　松平信綱は、幼名を長四郎といつた。

二　浪が荒くても漕ぎ出さう。

（文　語）

松平信綱は、幼名を長四郎といへり。

浪荒くとも漕ぎ出でむ。

右の例のは・を・と・が・て・も・とも は種々の語について、その語に意義を添へ、又は他の語との關係をあらはしてゐる。かゝる語を助詞といふ。助詞はテニヲハともいふ。

練習

一　次の文中から助詞を選び出せ。

助詞　テニヲハ　練習一〇

(一)　狼介は、怒つて弓をからりと捨て、洲に上るが早いか、四尺の大太刀を拔いて切つてかゝつた。

(二)　慶弔や慰問の手紙は自分の身を其の人の境遇において書かねばならぬ。

(三)　功を急ぎて過ずな。（文語）

(四)　追々店の様子もわかり、お客様の扱方にもなれて、仕事に興味を覺ゆるやう相成り申候。（文語）

二　次の助詞を用ひて短文を作れ。

より。から。まで。ば。ばかり。か。ぞ。こそ。な。（口語）

かな。とも。のみ。や。（文語）

品詞篇（下）

第一章　口語動詞の活用

一　口語動詞の活用形

口語動詞の活用形

ま	う	（第一形）
み	始める	（第二形）
む		（第三形）
む時		（第四形）
めば		（第五形）
め		（第六形）
よ（讀）		

ち	よう	（第一形）
ち	始める	（第二形）
ち	る	（第三形）
ち	る時	（第四形）
ち	れば	（第五形）
ちよ（ろ）		（第六形）
お（落）		

動詞には右のやうに變化しない部分と、變化する部分とがある。その變化しない部分を**語幹**といひ、變化する部分を**語尾**といひ、

語幹
語尾

その變化することを**活用**といひ、その變化する各の語形を**活用形**といふ。

活用
活用形

なほ動詞の語尾の變化は必ず五十音圖の同行の間に起る。即ち「讀む」は**マ行**、「落ちる」は**タ行**に於て活用する類である。

第一形　この形は「う」「よう」にいひつゞけ、動作のまだ成立しない意味をあらはす場合が多いから、これを**未然形**といふ。

未然形

第二形　この形は用言に連なる場合が多いから、これを**連用形**といふ。

連用形

第三形　この形は文を終止するために用ひる場合が多いから、これを**終止形**といふ。

終止形

第四形　この形は體言に連なる場合が多いから、これを**連體形**

連體形

假定形

命令形

口語動詞の活用の種類

四段活用

といふ。

第五形　この形は「ば」につゞけて假定の意味をあらはすから**假定形**といふ。

第六形　この形は命令の意味をあらはすに用ひる形であるから、これを**命令形**といふ。

二　口語動詞の活用の種類

一　四段活用

活用形 / 語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
讀ヨ	ま	み	む	む	め	め
死シ	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
居チ	ら	り	る	る	れ	れ

動詞の語尾が右のやうに五十音圖の**ア・イ・ウ・エ**の四段に互つて變化するものを**四段活用**といふ。

○この活用の動詞はカ・(ガ)・サ・タ・ナ・ハ・(バ)・マ・ラの各行にある。

二　上一段活用

活用形 / 語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
用モチ	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ ひろ
(着)キ	き	き	きる	きる	きれ	きよ きろ

動詞の語尾が右のやうに五十音圖の**イ**段にだけ活用し、終止形・連體形に**る**、假定形に**れ**、命令形に**よ**(**ろ**)の添ふものを**上一段活用**といふ。

上一段活用

下一段活用

○この活用の動詞はア・カ・(ガ)・(ザ)・タ・(ダ)・ナ・ハ・(バ)・マ・ヤ・ラ・ワの各行にある。

三　下一段活用

活用形 / 語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
受ウ	け	け	ける	ける	けれ	けよ けろ
求モト	め	め	める	める	めれ	めよ めろ

動詞の語尾が右のやうに五十音圖のエ段にだけ活用し、終止形・連體形に「る」、假定形に「れ」、命令形に「よ(ろ)」の添ふものを**下一段活用**といふ。

○この活用の動詞は五十音圖の各行及びガ・ザ・ダ・バの濁音四行にある。

以上四段・上一段・下一段の三つの活用を**正格活用**といふ。

正格活用

カ行變格活用

四　カ行變格活用

活用形 / 語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こい

「來ル」といふ動詞は右のやうに活用する。これを**カ行變格活用**といふ。

○この活用の動詞は「來ル」の一語だけである。

サ行變格活用

五　サ行變格活用

活用形 / 語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
(爲)	せ	し	する	する	すれ	せよ しろ

「爲(ス)る」といふ動詞は右のやうに活用する。これを**サ行變格活用**といふ。

○この活用の動詞は本來「**する**」の一語だけであるが、なほ他の語と熟合してサ行變格活用の動詞を作る。

贔屓(ヒイキ)する　勉强する　論ずる　全うする　リードする　の類。

變格活用

以上カ行變格活用とサ行變格活用との二つの活用を**變格活用**といふ。

活用の識別法

三　口語動詞活用の識別法

語數の少いもの

カ行變格活用　來(ク)る

サ行變格活用　爲(ス)る(この外、勉强する・論ずるの類)

四段・上一段・下一段の三活用に屬する動詞は、その數が多いけれ

ども次の見分法によつてこれを知ることが出來る。

打消の**ない**若しくは未來の**う・よう**を添へて

ア段ならば四段活用である。　讀ま‖ない。　有ら‖う。

イ段ならば上一段活用である。　起き‖ない。　試み‖よう。

エ段ならば下一段活用である。　隱れ‖ない。　受け‖よう。

假名遣識別法

四　口語動詞活用の假名遣識別法

(イ)　**ア行・ハ行・ヤ行・ワ行**の識別法

イ音

イの音の場合

ア行　射る　鑄る　……(上一段)

ワ行　居(ヰ)る　率ゐる　……(上一段)

ヤ行　老いる　悔いる　報いる　……(上一段)

エ音

エの音の場合

ア行　得る……（下一段）

ワ行　植ゑる　飢ゑる　据ゑる……（下一段）

ヤ行　甘える　癒える　怯える　覺える　消える

聞える　越える　肥える　凍える　冴える

榮える　聳える　絶える　費える　生える

冷える　殖える　吠える　まみえる　見える

燃える　悶える……（下一段）

以上の外はすべてハ行の活用である。

（ロ）ザ行・ダ行の識別法

上一段動詞中の案じる・通じる等のやうにじるが添うて成立したもの。

サ變動詞中の講ずる・論ずる等のやうに語尾が濁るもの。

文語動詞の活用形

練習二

右の外はすべてダ行活用である。

練習

次の文中の動詞の活用の種類と活用形を答へよ。

（一）村落や町が點在する。鐵道が見える。電車が走る。自動車が飛ぶ。人影が動く。

（二）弓が折れ矢が盡きて、勝久はいさぎよく切腹することに覺悟を定めた。

（三）上の方から、杖を突きながら、かけ下りて來る者がある。

（四）眞赤な夕陽を浴びて白帆が戻つて來る。

（五）此の日から山中鹿介幸盛と名乗り、心にかたく主家を興すことをちかつた。

第二章　文語動詞の活用

一　文語動詞の活用形

よ（讀）
まば（第一形）
み始む（第二形）
む（第三形）
む時（第四形）
めば（第五形）
め（第六形）

お（落）
ちば（第一形）（未然形）
ち始む（第二形）（連用形）
つ（第三形）（終止形）
つる時（第四形）（連體形）
つれば（第五形）（已然形）
ちよ（第六形）（命令形）

右の例のやうに、文語動詞もまた口語動詞と同じく六段に活用する。只口語と違つてゐるのは、口語では第五形にばが添うて假定の意味をあらはすが、文語では第一形にばが添うて假定の意味をあらはし、第五形にばが添うて確定の意味をあらはす點である。それ故に文語では第五形を已然形といふ。その外の未然・連用・終止・連體・命令の各形はその働きが大體口語の場合と

文語動詞の活用の種類

四段活用

同じであるから、名稱もまた同じである。

二　文語動詞の活用の種類

一　四段活用

活用形 / 語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	已然（假定）	命令
文語 書カ	か	き	く	く	け	け
口語 書カ	か	き	く	く	け	け

口語の四段活用の大部分は右のやうに文語に於ても五十音圖のア・イ・ウ・エの四段に亙つて活用するから、四段活用である。

○この活用の動詞はナ行にないほかは口語と同じである。

上一段活用

二　上一段活用

上二段活用

活用形 / 語幹 / 語尾	文語	口語
未然	き	き
連用	き	き
終止	きる	きる
連體	きる	きる
已然（假定）	きれ	きれ
命令	きよ	きよ（きろ）

右の例のやうに口語の上一段活用には、文語に於てもその語尾が五十音圖の**イ**段にのみ活用し、且つこれに**る・れ**が添うて活用するものがある。これを**上一段活用**といふ。

○この活用の動詞はア・カ・ナ・ハ・マ・ワの六行にある。

○文語の上一段活用には一音のものが多い。

三　上二段活用

活用形 / 語幹 / 語尾	文語	口語
未然	き	き
連用	き	き
終止	く	きる
連體	くる	きる
已然（假定）	くれ	きれ
命令	きよ	きよ（きろ）

右のやうに口語の上一段活用の大部分は、文語ではその語尾が五十音圖の**イ・ウ**の二段に互つて變化し、且つ**ウ**列に**る・れ**が添うて活用する。これを**上二段活用**といふ。

○この活用の動詞はカ・(ガ)・タ・(ダ)・ハ・(バ)・マ・ヤ・ラの各行にある。

下一段活用

四　下一段活用

活用形 / 語幹 / 語尾	文語	口語
未然	け	け
連用	け	け
終止	ける	ける
連體	ける	ける
已然（假定）	けれ	けれ
命令	けよ	けよ（けろ）

右のやうに「蹴る」といふ語は、文語でも五十音圖のエ段にのみ活用し、且つこれに**る・れ**が添うて活用する。これを**下一段活用**といふ。

○文語では下一段活用に屬する動詞は「**蹴る**」の一語だけである。

下二段活用

正格活用

五　下二段活用

活用形 / 語幹 / 語尾	文語	口語
未然	け	け
連用	け	け
終止	く	ける
連體	くる	ける
已然（假定）	くれ	けれ
命令	けよ	けよ（けろ）

右の例のやうに口語の下一段活用は、蹴るの外は、文語ではその語尾が五十音圖の**ウ・エ**の二段に亙つて變化し、且つ**ウ**列に**る・れ**が添うて活用する。これを**下二段活用**といふ。

○この活用の動詞は、五十音圖の各行及びガ・ザ・ダ・バの濁音四行にある。

以上四段・上一段・上二段・下一段・下二段の五つの活用を**正格活用**

カ行變格活用

といふ。

六　カ行變格活用

語幹＼活用形	未然	連用	終止	連體	已然（假定）	命令
文語	こ	き	く	くる	くれ	こよ
口語	こ	き	くる	くる	くれ	こい

右のやうに「來」といふ語は文語でもその語尾が五十音圖の**イ・ウ・オ**の三段に互つて活用し、且つ**ウ**列に**る・れ**が添うて活用する。これを**カ行變格活用**といふ。

○文語でもこの活用の動詞は「來」の一語だけである。

サ行變格活用

七　サ行變格活用

語幹＼活用形	未然	連用	終止	連體	已然（假定）	命令
文語	せ	し	す	する	すれ	せよ
口語	せ し	し	する	する	すれ	せよ しろ

右のやうに「爲」といふ語はその語尾が五十音圖の**イ・ウ・エ**の三段に互つて活用し、且つ**ウ**列に**る・れ**が添うて活用する。これを**サ行變格活用**といふ。

○文語でもこの活用の動詞は「爲」の一語だけであるが、なほ他の語と熟合してサ行變格活用の動詞を作る。

罰す　旅す　勉强す　講ず　全うす　の類。

ナ行變格活用

八　ナ行變格活用

活用形／語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然（假定）	命令
文語	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
口語	な	に	ぬ	ぬ	ぬ	ね

右のやうに「死ぬ」といふ語は口語では四段活用であるが、文語では連體形に**る**、已然形に**れ**が添ふ點が違ふ。これを**ナ行變格活用**といふ。

○この活用に屬する動詞は「**死ぬ**」「**往ぬ**」の二語だけである。

ラ行變格活用

九　ラ行變格活用

活用形／語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然（假定）	命令
文語	ら	り	り	る	れ	れ
口語	ら	り	る	る	れ	れ

右のやうに「有り」といふ語は口語では四段活用であるが、文語では終止形が**り**である點が違ふ。これを**ラ行變格活用**といふ。

○この活用の動詞は「**有り**」「**居り**」「**侍り**」の三語だけである。

なほ高かり・美しかりや、明瞭なり・平然たりも**ラ行變格活用**である。これらの語は事物の性質・狀態をあらはす點は形容詞と同

形容動詞

じく、活用は動詞と同じであるから、**形容動詞**とも呼んでゐる。口語では左の表のやうに活用する。

活用形 ／ 語幹・語尾	未然	連用	終止	連體	假定
静か	だら	だで だつ	だ	な	なら
美し	からで	でし でせ	です	○	○
	かつ				
	○				
	○				

（静かなればこそノヤウニ確定形モ時ニハ用ヒル）

變格活用

以上**カ變**・**サ變**・**ナ變**・**ラ變**の四つの活用を**變格活用**といふ。

左に口語・文語兩活用の種類を表示する。

文語動詞活用の識別法

口語（五種）

- 正格活用
  - 下一段活用……
    - 下一段活用
    - 下二段活用
  - 上一段活用……
    - 上一段活用
    - 上二段活用
  - 四段活用……
    - 四段活用
    - ナ行變格活用
    - ラ行變格活用
- 變格活用
  - カ行變格活用……
    - カ行變格活用
    - サ行變格活用
  - サ行變格活用……

文語（九種）

語數の少いもの

三　文語動詞活用の識別法

上一段活用　射る　鑄る　著る　煮る　似る　干る
見る（顧みる・惟みる・鑑みる・試みる）　居る　率ゐる

下一段活用　蹴る

カ行變格活用　來

サ行變格活用　爲（この外、信ず・勉強すの類）

ナ行變格活用　死ぬ　往ぬ

ラ行變格活用　有り　居り　侍り

四段・上二段・下二段の三活用に屬する動詞は、その數が多いけれども、左の見分法によつてこれを知ることが出來る。

打消のず若しくは未來のむを添へて

ア段ならば四段活用である。　讀ま‖ず。　書か‖む。

イ段ならば上二段活用である。　起き‖ず。　落ち‖む。

エ段ならば下二段活用である。　受け‖ず。　榮え‖む。

文語動詞活用の假名遣は口語動詞活用の識別法に準じて知ることが出來る。

練習一二

練習

一　次の動詞について文語が口語かを見分けよ。

(イ) 絕える　(ロ) 用ひる　(ハ) 悔ゆ　(ニ) 與へる　(ホ) 敎ふ　(ヘ) 告ぐ

二　次の文中の動詞の活用の種類と活用形の名とを示せ。

(一) 大空に聳えて見ゆる高嶺にも登れば登る道はありけり。

(二) 梅は散りて鶯の聲も老いたり。春は漸くたけなはならんとす。

(三) 大勢の人々が熟したるコーヒーの實を手にてこき落しこれを集めてみぞに投入れ候へば、まじりたる石・砂などは沈み、實のみ浮びて流れ候を、下流にてすくひ上げ、之を廣きほし場にて乾かし候。

(四) 强固なる目的と確實なる手段とを有する者は、盛に海外に雄飛して、國運の發展に貢獻すべし。

三　左の文中の動詞の活用及び活用形に誤があれば正せ。

(一) 汝に出ずるものは汝にかへる。
(二) 鷹は飢ゆとも穂はつまず。
(三) 困難に堪えうる人は年老ひて憂なからむ。
(四) 恥じてよく改め覺へて忘れず。
(五) 老いて悔ゆこと勿れ。
(六) 日の暮るを待ちて檜の岐阜提灯に火を點ずる。
(七) もし御存知の事あれば何とぞ至急御教示の程よろしく御願申上候。

第三章　形容詞の活用

一　口語形容詞の活用

語幹
語尾
活用

高
- く　立つ
- い
- い　波
- ければ

美し
- く　咲く　（副詞形）
- い　（終止形）
- い　花　（連體形）
- ければ　（假定形）

（高くてものやうに助詞「ても」に連る時に限つて、假定に副詞形が用ひられる）

形容詞も動詞のやうに、變化しない部分と、變化する部分とを有する。その變化しない部分を語幹といひ、變化する部分を語尾といひ、變化することを活用といふ。これを今表示すると左の通りである。

口語形容詞活用表

活用形／語幹／語尾	副詞	終止	連體	假定
高（タカ）美（ウツク）し	く	い	い	けれ

副詞形は連用形といふこともある。

二　文語形容詞の活用

文語形容詞の活用

高
- く　聳ゆ（副詞形）
- し　（終止形）
- き　山（連體形）
- けれ　ども（已然形）
- ば

美
- しく　咲く（副詞形）
- し　（終止形）
- しき　花（連體形）
- しけれ　ども（已然形）
- ば

ク活用

シク活用

右の例のやうに、文語形容詞には二通りの活用がある。一をク活用といひ、他をシク活用といふ。これを表示すると左の通りである。

文語形容詞活用表

活用形 ＼ 語幹 ＼ 語尾	副詞	終止	連體	已然
ク活用 高（タカ）	く	し	き	けれ
シク活用 美（ウツク）	しく	し	しき	しけれ

已然形

口語形容詞の假定形は、文語では確定をあらはすに用ひられるから、已然形といふ。

文語の副詞形は、高くば、美しくともものやうに假定をあらはすこともある。

練習一三

練習

左の文中から形容詞を拔出し、その活用形を言へ。

(一) 暑い日盛に、あつちでも、こつちでも、田の草を取つてゐる。

(二) 日本の馬は氣が荒いとかいはれるさうだが、それも馬が惡いのではない、扱ふ人がいけないから、馬に惡いくせが附いてしまふのだ。

(三) 遠き慮なければ必ず近き憂あり。(文語)

(四) 朝夕は餘程凌ぎ易く相成り候へど、日中の暑さは未だ堪へ難く候。(文語)

(五) 一日も早く一人前の商人となりて、親に安心致させたしと存じ居り候。(文語)

第四章　音　便

動詞の音便

動詞の音便

動詞の連用形から**て・たり・た**に連る時、その語尾が發音の便宜上、

他の音に轉ずることがある。これを**動詞の音便**といひ、その文字をも書き改めねばならぬ。

動詞の音便には左の四種がある。

イ音便

一　イ音便　四段活用動詞の連用形**き・ぎ**が**い**に轉ずるもの。

說き。 — 說いて (口語・文語)　說いた (口語)　說いたり (口語)

泳ぎ — 泳いで (口語・文語)　泳いだ (口語)　泳いだり (口語)

ウ音便

二　ウ音便　四段活用動詞の連用形**ひ**が**う**に轉ずるもの。

買ひ。 — 買うて (口語・文語)　買うた (口語)　買うたり (口語)

撥音便

三　撥音便　四段活用・ナ行變格活用動詞の連用形に**び・み**が

撥音ん|に轉ずるもの。

死に。（死んで（口語・文語）　死んだ（口語）　死んだり（口語））

飲み。（飲んで（口語・文語）　飲んだ（口語）　飲んだり（口語））

學び。（學んで（口語・文語）　學んだ（口語）　學んだり（口語））

促音便

四　促音便　四段活用・ラ行變格活用動詞の連用形ち・ひ・り|が促音つ|に轉ずるもの。

勝ち。（勝つて（口語・文語）　勝つた（口語）　勝つたり（口語））

買ひ。（買つて（口語・文語）　買つた（口語）　買つたり（口語））

有り。（有つて（口語・文語）　有つた（口語）　有つたり（口語））

形容詞の音便

練習一四

形容詞の音便

一　イ音便　連體形き・しき|がい・しい|に轉ずるもの。

善き。哉　喜い。哉（文語）

美しき。花　美しい。花（文語）

二　ウ音便　副詞形く・しく|がう・しう|に轉ずるもの。

有難く。ございます。有難う。ございます。（口語）

おなつかしく。存じ候。おなつかしう。存じ候。（文語）

練習

一　左の文中の動詞・形容詞の音便を指摘してその原音を

示せ。

(一) 狼介は怒つて弓をからりと捨て、洲に上るが早いか、四尺の大太刀を拔いて切つてかゝつた。

(二) 仕事臺のそばに、ふさぎ込んでゐた女の子が、それを見つけて、思はず「あら」と叫んだ。

(三) 學問は重荷を負うて坂を攀づるが如し。(文語)

(四) 秋も深うなりまさりて蟲の音もいと怨めしう身に沁む。(文語)

二　左の文の誤を正し、且つその理由を述べよ。

(一) 死むだ氣になつて働ひて見よ。

(二) 首尾よふ卒業せられておめでたふございます。

(三) 思ふてゐるばかりでは埒があかぬ。言ふて見よ。

(四) 今よりはよく行を愼むでかゝる過は再びすまじと誓ふたり。(文語)

(五) 先般はわざ〳〵の御來駕を辱ふし有難く御厚禮申上候。(文語)

(六) 貴殿の御賛同を得たる事は小生の大いに意を强ふする所謹むで御禮申述候。(文語)

受身の助動詞
れる
られる

第五章　口語助動詞の種類及び活用

一　受身の助動詞

一　犬にかまれる。

二　先生にほめられる。

右のれる・られるは或ものが他のものから動作を受ける意味をあらはすもので、これを受身の助動詞といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ れろ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ られろ

可能の助動詞
れる
られる

使役の助動詞
せる
させる

二　可能の助動詞

一　この本は私にも讀まれる。

二　六尺の塀でも飛び越えられる。

右のれる・られるはその動作を成し得る意をあらはすもので、これを可能の助動詞といふ。

活用は受身の助動詞と同じであるが、命令形がない。

三　使役の助動詞

一　生徒に字を書かせる。

二　大工に家を建てさせる。

右のせる・させるは或ものが他のものに動作を行はせる意味をあらはすもので、これを使役の助動詞といふ。

崇敬の助動詞
れる
られる

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ せろ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ させろ

四　崇敬の助動詞

一　父上はよく字を書かれる。

二　先生は毎月上京せられる。

右のれる・られるは他の動作を敬ふ意をあらはすもので、これを崇敬の助動詞といふ。

活用は受身の助動詞と同じであるが、命令形は普通用ひない。

○一層改まつた敬語としてはせられる・させられるを用ひることもある。

ます

三　今日は雪が降ります。

このますは動作の主に對する尊敬ではなくて、話の相手に對する敬意を示すものである。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ます	ませ	まし	ます まする	ます まする	ますれ	ませ まし

お…なさる
お…になる

四　今日は伯母さんがお出でなさる。

五　伯母さんは字を上手にお書きになる。

右のやうに動詞を助動詞のやうに用ひて敬ふ意をあらはす場合も多い。

助勢の助動詞

た

五　助勢の助動詞

彼はますます勉強するのであつた。

右のたは動作を力づよくいひあらはすもので、これを**助勢の助動詞**といふ。この助動詞を**完了の助動詞**ともいふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
た	たら	○	た	た	たら	○

完了の助動詞

時の助動詞

過去の助動詞

た

六　時の助動詞

(イ)　過去の助動詞

一　昨日雪が降つた。

二　去年卒業した。

右のたは動作が既に過ぎ去つた意をあらはすもので、これを**過去の助動詞**といふ。

未來の助動詞

う

よう

(ロ)　未來の助動詞

一　明日は雨が降らう。

二　明日は空が晴れよう。

右のう・ようは動作が未來に起る意をあらはすもので、これを**未來の助動詞**といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
う	○	○	う	う	○	○
よう	○	○	よう	よう	○	○

なほう・ようは次のやうに意志を示すこともある。

今度は勝つてやらう。　僕もやつて見よう。

七　推量の助動詞

一　向ふに見えるのは山だらう。

二　月はあの山から出よう。

三　やがて櫻も咲くらしい。

四　誰かゐるらしかつた。

推量の助動詞
う
よう
らしい
らしかつ

さうだ
さうです

五　ラヂオの氣象通報によると、午後には雨が降りさうだ。

（さうです）

右のう・よう・らしい・らしかつ・さうだ（さうです）は事物を推量する意をあらはすもので、これを**推量の助動詞**といふ。

う・ようの活用は未來の助動詞と同じで、らしい・らしかつ・さうだ・さうですは次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用（副詞）	終止	連體	假定	命令
らしい	○	らしく	らしい	らしい	○	○
らしかる	○	らしかつ	○	○	○	○
さうだ	さうだら	さうだつ　さうで　さうに	さうだ	さうな	さうなら	○
さうです	さうでせ	さうでし	さうです	○	○	○

打消の助動詞
ない
ぬ
なかつ
まい

八　打消の助動詞

一　書を讀まない。
　　ぬ。

二　書を讀まなかつた。

三　彼は行くまい。（打消の推量）

右のない・ぬ・なかつ・まいは打消の意味をあらはすもので、これを**打消の助動詞**といふ。

助動詞	未然	連用（副詞）	終止	連體	假定	命令
ない	○	なく	ない	ない	なけれ	○
ぬ（なかる）	なから	なかつ	○	○	○	○
ぬ	○	ず	ぬ（ん）	ぬ（ん）	ね	○
まい	○	○	まい	まい	○	○

指定の助動詞

九　指定の助動詞

だ
です

一　これは梅の花だ。

二　あれは桃です。

右のだ・ですは指し定める意味をあらはすもので、これを**指定の助動詞**といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
だ	だら	だつ	だ	○	なら	○
です	でせ	でし	です	○	○	○

比況の助動詞
やうだ
やうです

一〇　比況の助動詞

人生は夢のやうだ。
　　やうです。

右のやうだは事物を比較説明する意をあらはすもので、これを**比況の助動詞**といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
やうだ	やうだら	やうだつ やうで やうに	やうだ	やうな	やうなら	○
やうです	やうでせ	やうでし	やうです	○	○	○

一一　希望の助動詞

一　早く歸りたい。

二　僕も行きたかつた。

右のたいたかつは希望の意をあらはすもので、これを**希望の助動詞**といふ。

助動詞	未然	連用（副詞）	終止	連體	假定	命令
たい	○	たく	たい	たい	たけれ	○
（たかる）	たから	たかつ	○	○	○	○

希望の助動詞
たい
たかる

練習一五

練習

左の文中の助動詞を指摘し、その種類及び活用形をいへ。

(一)　數年は過ぎた。尼子の本城である出雲の富田城は、其の頃毛利軍に圍まれてゐた。

(二)　彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。

(三)　文明の進んだ今日尙此のやうな考を持つのは、大きな誤といはねばならぬ。

(四)　柿の木さへ時が來ればあのやうに色づくのに、どうして人間の力で燒物に赤い色が附けられないだらうか。

(五)　長男は商業學校を卒業させて實業に就かせ、次男は陸軍士官學校に入學させて陸軍士官にした。

受身の助動詞

第六章　文語助動詞の種類及び活用

一　受身の助動詞

る
らる

一　犬にかまる。
二　先生にほめらる。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ

可能の助動詞
る
らる
べし
べかり

二　可能の助動詞

一　この本は我にも讀まる。
二　六尺の塀も飛び越えらる。
三　腰間の秋水鐵をも斷つべし。
四　その勢あたるべからず。

右の中、る・らるの活用は受身の助動詞と同じであるが、命令形がない。

助動詞	未然	連用（副詞）	終止	連體	已然	命令
べし	○	べく	べし	べき	べけれ	○
べかり	べから	べかり	（べかり）	（べかる）	（べかれ）	○

括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。以下も同様である。

「べし」は又義務・命令の意にも用ひられる。

法律は人間の爲すべき行爲の一部を示すに過ぎず。
明日八時出頭すべし。

使役の助動詞
す
さす

三　使役の助動詞

一　生徒に字を書かす。
二　大工に家を建てさす。

しむ

三　下男に田を耕さしむ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

崇敬の助動詞

る
らる
す
さす
しむ

四　崇敬の助動詞

一　父はよく字を書かる。

二　校長は毎年上京せらる。

三　主上都を出で立たす。

四　御元服も院にてせさす。

五　おほやけにも屢〻行幸せしめ給ふ。

右のる・らるの活用は受身の助動詞と同じく、す・さす・しむの活用は使役の助動詞と同じである。

○崇敬のす・さす・しむは通例らる又は給ふの上に結びつけて用ひる。

一　謹みて新年を賀したてまつる。

二　いくつといふことも更におぼえ侍らず。

三　本日出發仕り候。

右のやうに動詞を助動詞のやうに用ひて、自己の動作を謙讓し、或は言葉を丁寧に言ふもののもある。

五　助勢の助動詞

助勢の助動詞

つ
ぬ
たり
り

一　書を讀み（つ。ぬ。たり。）

二　書を讀めり。

右のつ・ぬ・たり・りは動作を力づよくいひあらはすもので、**助勢の助動詞**といふ。

この助動詞をまた**完了の助動詞**ともいふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	○
り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	(れ)

完了の助動詞

六　時の助動詞

(イ)　過去の助動詞

一　花散りき。

二　花散りけり。

時の助動詞

過去の助動詞

き

けり

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
き	○	○	き	し	しか	○
けり	(けら)	(けり)	けり	ける	けれ	○

○「き」「けり」は更に「つ」・「ぬ」・「たり」・「り」の連用形に添へて用ひられることもあるが、現代文にはあまり用ひられない。

(ロ)　未來の助動詞

明日、空晴れむ。(ん)

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
む	○	○	む	む	め	○

○「む」は更に「つ」・「ぬ」・「たり」・「り」の未然形に添へて用ひられることもあるが、現代文にはあまり用ひられない。

未來の助動詞

む(ん)

推量の助動詞

む
らむ
けむ
べし
らし

七　推量の助動詞

一　かくては大風にならむ。
二　靜心なく花の散るらむ。
三　いつの頃なりけむ、確には覺えず。（過去の推量）
四　月はかの山より出づべし。
五　時雨降るらし。

助動詞	未然	連用（副詞）	終止	連體	已然	命令
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ	○
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	○
べし	○	べく	べし	べき	べけれ	○
らし	○	らしく	らし	（らし）らしき	（らし）	○

めり
まし

打消の助動詞

ず
ざり
じ
まじ

○なほ現代文では用ひられないけれども、めり・ましといふ推量の助動詞がある。

立田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ。

山里に散りなましかば櫻花匂ふさかりも知られざらまし。

八　打消の助動詞

一　花咲かず。
二　予は出席せざりき。
三　彼はまだ遠くは行かじ。（打消の推量）
四　夜はまだ明くまじ。（打消の推量）

助動詞	未然	連用（副詞）	終止	連體	已然	命令
ず	○	ず	ず	ぬ	ね	○
ざり	ざら	ざり	○	ざる	ざれ	ざれ

じ	○	○	じ	(じ)	(じ)	○
まじ	○	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○

九　指定の助動詞

指定の助動詞

なり

一　かしこに見ゆるは我が家なり。

二　花の散りくるなり。

たり

三　君君たり、臣臣たり。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

一〇　咏嘆の助動詞

咏嘆の助動詞

なり

一　秋の野に人待つ蟲の聲すなり。

けり

二　見渡せば花も紅葉もなかりけり。

右のなり・けりは咏嘆の意をあらはすもので、これを**咏嘆の助動詞**といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	○	○	なり	なる	なれ	○
けり	○	○	けり	ける	けれ	○

指定のなりは連體形に添ひ、咏嘆のなりは終止形に添ふ。

一一　比況の助動詞

比況の助動詞

ごとし

一　落花雪の如し。

二　歳月流るる(が)如し。

助動詞	未然	連用（副詞）	終止	連體	已然	命令
ごとし	○	ごとく	ごとし	ごとき	○	○

一二　希望の助動詞

一　御安心なし下されたく候。

二　會ひたかりき。

希望の助動詞

たし

たかり

助動詞	未然	連用（副詞）	終止	連體	已然	命令
たし	○	たく	たし	たき	たけれ	○
たかり	たから	たかり	（たかり）	（たかる）	（たかれ）	○

練習一六

練習

左の文中から助動詞を拔出して、その種類及び活用形を言へ。

（一）苟もこの國に生まれ、この國民たり、この國民の子孫たるもの、誰かこの光を仰がざるべき。

（二）昔、袴垂といふ盜人ありけり。着物をはぎ取らんとて、或夜町外れに出でて人の來るを待ちゐたるに、身分賤しからざる人、暖げなる着物着て、笛を吹きながら歩み來れり。

（三）皆様御無事でいらせられ候や御伺ひ申上候。

（四）よもや負くる事のあるまじとは存ぜられ候へど、油斷はくれ〴〵も禁物に御座候。

（五）母も人間なれば、我が子にくしとはつゆ思ひ申さず。如何ばかりの思にて此の手紙をしたためしか、よく〳〵お察し下されたく候。

第七章　助動詞の接續

一　口語助動詞の接續

動詞の未然形につゞく助動詞

一　動詞の未然形につゞく助動詞

（四段活用）　（上一段カ変格　下一段サ変格）

- 起き
- 受け
- 來（こ）
- 讀ま
- せ（し）

- れる……（受身・可能・崇敬）
- せる……（使役）
- られる……（受身・可能・崇敬）
- させる……（使役）
- よう……（未來・推量）
- まい
- ぬ（ない）……（打消）
- う
- ぬ（ない）

右の中、よう・まい・ないはサ變活用に對してはしにつゞく。又まいは四段活用に對してはその終止形につゞく。動詞するにられる・させるが添うてせられる・せさせるとなる形は、約つてされる・させるとなることが多い。

動詞の連用形につゞく助動詞

二　動詞の連用形につゞく助動詞

- 押し
- 起き

- た……（助勢・過去）
- ます……（崇敬）
- たい……（希望）
- さうだ……（推量）

動詞の終止形につゞく助動詞

三　動詞の終止形につゞく助動詞

（四段活用）　（上一段カ変格　下一段サ変格）

- 讀むまい……（打消）
- 讀むらしい。　霽れるらしい。（推量）

らしいは形容詞の終止形にも添ふ。

體言又は用言の連體形につゞく助動詞

四　體言又は用言の連體形につゞく助動詞

讀む　だらう……（指定）
起きる　でせう……（指定）
美しい　さうだ……（推量）
　　やうだ……（比況）

右の中、指定のだ・ですは未然形だらう・でせう、假定形ならの形の外は助詞「の」を間に入れて用言につゞく。

君が讀むのです。（のだ。）
それでよいのです。（のだ。）

海　だ……（指定）
彼　です……（指定）
　　のやうだ……（比況）

比況の助動詞は體言には助詞「の」を間に入れてつゞく。

二　文語助動詞の接續

一　動詞の未然形につゞく助動詞

動詞の未然形につゞく助動詞

四段　る（受身・可能・崇敬）……父學校より歸らる。
ナ變　父に死なる。
ラ變　す（使役・崇敬）……君側に侍らす。
上一段　狡兎死して走狗煮らる。
上二段　らる（受身・可能・崇敬）……病の爲に起きられず。
下一段　前庭にて鞠を蹴らる。
下二段　試驗を受けさす。
カ變　さす（使役・崇敬）……早く來さす。
サ變　行幸せさせ給ふ。

動詞の連用形につゞく助動詞

全動詞
- しむ（使役・崇敬）……書を讀ましむ。
- む（未來・推量）……鞠を蹴む。
- ず（打消）……多くを求めず。
- じ……まだ遠くは行かじ。
- ざり……我は見ざりき。

サ變――り（助勢）……運動せり。

二　動詞の連用形につゞく助動詞

全動詞
- つ
- ぬ
- たり
- （助勢）……書きもらしつ。日暮れぬ。全軍を率ゐたり。
- き（過去）……友死にき。
- けり（過去・詠嘆）……昔、人ありけり。

動詞の終止形につゞく助動詞

- けん（推量）……いつの頃より興りけん。
- たし（希望）……右につきて論じたし。

右の中、きがカ・サ變格の動詞につゞく場合に限り、左表のやうな例外がある。

	未然	連用
カ變	來（コ）し しか	來（キ）し しか
サ變	爲（セ）し しか	爲（シ）き

三　動詞の終止形につゞく助動詞

ラ行變格以外の動
- らむ
- べし（推量）……
- らし

- 名張の山を今日か越ゆらむ。
- 明日は雨霽るべし。
- 月出づらし。

詞　まじ（打消）……其の法は用ふまじ。
　　べかり（可能）……寸時も忘るべからず。
　　なり（咏嘆）……蟲の聲すなり。

右の助動詞がラ行變格の動詞と結びつく場合には、その連體形からつゞく。

君側に侍るべし。　かくこそ有るらし。

體言又は用言の連體形につゞく助動詞

四　體言又は用言の連體形につゞく助動詞

全動詞　如し（比況）　水の流るる如し。
形容詞　なり（指定）　花の美しきなり。

○如しは助詞「が」を挾んで添ふことが多い。

花の美しきが如し。　水の流るるが如し。

已然形につゞく助動詞

體言　なり（指定）　あれは我が家なり。
　　たり（指定）　父、父たり。
　　如し（比況）　海の面鏡の如し。

○比況の如しが體言に添ふ時は助詞「の」「が」が間に入るのが普通である。

我が如くものや悲しき。　汝が如きものはかく言ふ資格なし。

五　已然形につゞく助動詞

四段活用――り（助勢）……書を讀めり。

練習一七

練習

一　左の文中より助動詞を拔出して、そのつゞき方を說明せよ。

(一)　も一度ゆつくり考へて見よう。
(二)　人の顏がやつと見分けられるやうになつた。

(三) 少しでも納めさせていただくわけには行きませんでせうか。
(四) 那須の與一に扇の的を射させる。
(五) 秋きぬと目にはさやかに見えねども、風のおとにぞおどろかれぬる。(文語)
(六) 遙かに忘れたるこし方も今更思ひだされて、消え入るばかりなり。(文語)
(七) 今度の一戰には必ず敵をして再び起つこと能はざらしめんと、大膽にして周密なる方策を定め、非常の覺悟を以て戰機の熟するを待てり。(文語)

二　次の文に誤があれば正し、且つその理由を説明せよ。

(一) 「お前が世話をしやうといふのか。よかろう。一つやつてごらん。細かい事は段々に話してあげやう。」
(二) 小鳥も蝶も蜂も一年に二度とない此の花盛を、一時でも長く樂しもうとするかのようだ。
(三) 誰の助も受けずに自力でやらふと思ひます。
(四) 今日先生の出せし問題は甚だ解し易かりし。(文語)

(五) その文章を余に讀ましし給へ。(文語)
(六) 汝が考ふ如く容易に破られまじ。(文語)
(七) 汝自ら爲し得ざることは、之を人に強ゆるべからず。(文語)

第八章　助詞の種類及び係結の法則

一　助詞の種類

一　第一類　體言に添ふ助詞

體言に添ふ助詞

	口語	文語
が	花が咲く。	君が代。
の	池の堤。	池の堤。
	雨の降る日。	花の咲く頃。
を	花を觀る。	月を賞す。

に	東京に著いた。	東京に著きぬ。
	西に向つた。	山の芋鰻に化す。
	山の芋が鰻になる。	東へ向ひぬ。
へ	東京へ著いた。	菓子と蜜柑(と)を食す。
	東へ向つた。	……太郎と言ふ。
と	菓子と蜜柑(と)を食べる。	弟と遊ぶ。
	幼名を太郎と言つた。	毛筆にて書く。
	弟と遊んだ。	
から	學校から歸る。	
で	毛筆で書く。	
にて		

活用する語に添ふ助詞

二　第二類　活用する語に添ふ助詞

	口語	文語
ば	明日雨が降れば延期しよう。	明日雨降らば延期せむ。
		本日は雨降れば中止す。
ても	雨が降つても行かう。	雨降るとも行かむ。
とも	短くともよい。	
けれど(も)	雨が降るけれど(も)行かう。	雨降れど(も)行かむ。
ど(も)		
と	早く歸らないと心配する。	

から　雨が降るから行かない。　大いに努力せしが、かひなかりき。

ので　遠いので寄らなかつた。　日くれたるに宿るべき家もなし。

が　大いに努力したが、かひがなかつた。　雨降るを出で行きぬ。

のに　日がくれたのに宿る家もない。　海に入りて魚を捕ふ。

に

を

て　海に入つて魚を捕へる。　言はでやみぬ。

で　行きつゝ歌ふ。

つつ　惡いと知りつゝ改めない。　歩きながら讀む。

ながら　涙を流しながら話す。

し　夏は涼しいし、冬は暖かい。

種々の品詞に添ふ助詞

三　第三類　種々の品詞に添ふ助詞

口語	文語
は　櫻は日本の國花だ。	櫻は日本の國花なり。
も　野も山も綠だ。	野も山も綠なり。

ぞ　僕は日本男兒だぞ。
　　我は日本男子なるぞ。
　　花ぞ落つる。

や　夜は靜かに眠らるや。
　　花や咲きし。

か　お前は誰か。
　　汝は誰なるか。
　　誰かある。

なむ　人と爭はざるなむ賢き。

こそ　彼こそ眞の英雄だ。
　　彼こそ眞の英雄なれ。

ばかり　親のことばかり思はれる。
　　今日ばかり人も訪ひ來ず。

だけ　お前にだけ知らせる。

のみ　親のことのみ思はる。

しか　少ししかありません。

など　今頃月などあるものか。
　　御酒・果物などまゐる。

だに　鳥にだにしかず。

すら　草木すら情あり。

さへ　鳥にさへ及ばない。
　　風烈しく雨さへ降る。

まで　大阪まで行く。
　　國學・漢學は勿論、洋學まで學んだ。
　　京都まで行く。

より　死ぬよりつらい。
　　死ぬるよりつらし。

な　親の恩を忘れるな。
な：そ　學校より歸る。
かな　親の恩を忘るな。
な　うまくだまされたな。
ね　よく出來ましたね。
よ　これが目じるしですよ。
や　太郎や、こゝへお出で。
ばや　苔の袂よ、乾きだにせよ。
なむ　げにあが君や、幼なの御物言ひや。
　我都に行かばや。
　櫻花とく咲かなむ。

がな　よき友もがな。
かし　とく行けかし。

二　係結の法則

花ぞ散りける。
人と爭はざるなん賢き。
夜や明けぬる。
誰かある。
物のあはれは秋こそまされ。

右の例の樣に文語では文中に「ぞ・なん・や・か」が置かれた場合には下を連體形で結び「こそ」が置かれた場合には下を已然形で結ぶ。これを**係結の法則**といふ。但し口語にはこの法則はない。

練習

一　次の文中から助詞を摘出し、何類に屬するかを言へ。

(一)　手紙は用事さへ通ずれば短くともよい。

(二)　我らは何のために學校に學ぶか。いふまでもなく、智能を啓發し、德器を成就するがためである。

(三)　ポチは朝起だから、僕が起きる時分にはもう一しきり遊んだところだが、僕の聲を聞きつけると、何處に居ても一もくさんにとんで來る。

(四)　心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神や守らん。(文語)

(五)　上るや石のきざはしの左に高き犬いてふ、問はばや遠き世々の跡。(文語)

二　次の文語文の係結について説明せよ。

(一)　勉强に倦み給はん折は花なんこよなき慰めなる。

(二)　目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心のまことなりけれ。

(三)　昨日こそ早苗とりしかいつのまに稻葉そよぎて秋風の吹く。

(四)　誰かあはれと思はざるべき。

第九章　接頭語・接尾語

一　接頭語

お手紙　御安心　み佛(文)　うひ陣　はつ春　ほの見ゆ(文)

さしはさむ　もの淋し(文)　け高い　生やさしい。

右の例のやうに、單獨では用ひられず、ある他の語の上について、其の語と熟語をなすものを**接頭語**といふ。接頭語には意味を添へるものと、添へないものとがある。そして接頭語が添うて出來た熟語はもとの語と品詞を同じくする。

二　接尾語

私ども　僕ら　あなたがた　兄さん　松岡君　黑さ　厚み

春めく　うれしがる　男らしい　露けし(文)　少しづつ　悲しげ(文)

右の例のやうに、單獨では用ひられず、ある他の語の下について、

其の語と熟語をなすものを**接尾語**といふ。接尾語はいづれもある意味を添へる。そして接尾語が添うて出來た熟語は、接尾語の性質によつて品詞を異にするものである。

第一番　二軒　三升　四雙　五腰

右の如く數詞に接合する接頭語・接尾語を助數詞といふ。助數詞には物の品種によつて慣用があるから、濫りに用ひることは出來ない。

助數詞

第十章　品詞の轉成

轉成の名詞

一　轉成の名詞

(イ) 動詞の連用形から＝光。霞。氷。謠。

(ロ) 文語動詞の終止形から＝かげろふ。すまふ。勝(マサル)。(人名)

(ハ) 形容詞の語幹から＝高低(タカヒク)。白。

(ニ) 形容詞の語幹に接尾語み・さが添ふ。厚み。重さ。

(ホ) 形容詞の副詞形から＝近くに住む。遠くより來たる。(文語)

(ヘ) 文語形容詞の終止形から＝あかし(燈)。すし(鮓)。弘(ヒロシ)(人名)。

轉成の副詞

二　轉成の代名詞

名詞から＝君。僕。殿。

三　轉成の副詞

(イ) 名詞から＝つゆまどろまず。終日食はず、終夜いねず。(文語)

(ロ) 動詞の連用形から＝それではあまり氣の毒だ。

(ハ) 形容詞の副詞形から＝花少しく開く。(文語)

轉成の接續詞

四　轉成の接續詞

(イ) 名詞から＝暑さ甚しく候處、御障りも無之候や。(文語)

(ロ) 動詞から＝土曜日及び日曜日は休業す。(文語)

練習一九

(ハ)　副詞から＝山また山を越ゆ。（文語）

(ニ)　助詞から＝雨は止んだ。が、風はまだ強い。

練習

一　左の文中から接頭語と接尾語とを摘出せよ。

(一)　お前の殘念がるのももつともだ。

(二)　色々御世話になりました。この御恩は決して忘れませぬ。

(三)　御刀の汚れにて候。雜卒ばらの手にかゝり給はば末代までの御恥辱にて候。（文語）

(四)　秋らしくなりていと露けし。（文語）

二　左の文中から轉成の語を摘出して説明せよ。

(一)　天下の雲行は殆ど息苦しいまでに切迫してゐた。

(二)　たとひ手當のかひはないにしても出來るだけのことは盡したい。

(三)　流はよどんで底知らぬ青さをたたふ。（文語）

(四)　此處の海は遠淺にて海水浴場として知らる。（文語）

文章篇

第一章　文の成分

一　主語・述語

文の成分

主語・述語

一　櫻が　散る。

二　花が　美しい。

三　櫻は　國花だ。

右の例の(一)は「何がどうする。」(二)は「何がどんなだ。」(三)は「何が何だ。」といふ形式の文である。そして「何が」に當るもの、卽ち文の題目を表はす語を主語といひ、「どうする」「どんなだ」「何だ」に當るもの、卽ち題目の動作・性質・狀態を表はす語を述語といふ。

主語と述語とはどの樣な文にも缺くことの出來ぬものである

文の主成分

からこれを特に文の主成分といふ。

主語の構成

二　主語の構成

一　月が　清い。

二　鳥　鳴く。（文語）

右の例のやうに、主語は體言が單獨に表はれる場合と、下に助詞の添うて表はれる場合とがある。

三　白いのは　梅です。

散るぞ　めでたき。（文語）

右の例のやうに、主語は、又體言に準ずる語からなることがある。

述語の構成

三　述語の構成

一　櫻が　咲いた。

二　旅行は　樂しかつたか。

三　波　高し。（文語）

右の例のやうに、述語は普通に用言又は用言に助動詞・助詞が添うて表はれるものである。

四　正成は　忠臣です。

五　怒濤　山の如し。（文語）

右の例のやうに、述語は、又體言に助動詞が連つた語から成ることがある。

修飾語

四　修飾語

一　親しい友人が　來た。

二　風　さつと吹く。（文語）

右の例で、親しいは友人を修飾し、さつとは吹くを修飾してゐる。かやうに文中にあつて他の語を修飾する語を修飾語といふ。

そして親しいのやうに體言を修飾するものを**形容詞的修飾語**といひ、さつとのやうに用言を修飾するものを**副詞的修飾語**といふ。

形容詞的修飾語の構成

五　形容詞的修飾語の構成

一　長閑な光が　油のやうな海面に　融けてゐる。

二　逃げた駱駝を　探しに行く。

三　我が庭に　美しき朝顔　咲けり。（文語）

右のやうに形容詞的修飾語は用言の連體形、用言・體言に助動詞の添うたものの連體形、體言に助詞のついたものなどから成る。

副詞的修飾語の構成

六　副詞的修飾語の構成

一　一切の物音は　はたと　絶えた。

二　彼は　笑ひながら　話した。

三　園の花　美しく　開きたり。（文語）

右のやうに副詞的修飾語は副詞または副詞に準ずる語から成る。

一　猫　鼠を　捕ふ。（文語）

二　太郎は　級長と　なつた。

三　父　家を　子に　讓る。（文語）

右の例の傍線の引いてある語はそれ〴〵に用言を修飾する副詞的修飾語であるが、かやうに體言に助詞と・を・にの結合してゐるものは特に之を**客語**といふこともある。

客語

七　獨立語

獨立語

一　あの人は性質がよい。それに學問も出來る。

接續の語

二　南都奈良に遊ぶ。（文語）

同格の語

呼掛の語
感動の語
提示の語

三　太郎や、おまへもう學校に行かないかえ。
四　あゝ、花が咲いた。
五　大日本帝國は、萬世一系の天皇之を統治す。（文語）

右の例のやうに接續・同格・呼掛・感動・提示の語は、直接、文の成立には關係のないものである。かやうな語を**獨立語**といふ。

練習二〇

練習

左の文中から主語・述語・修飾語・客語・獨立語を摘出し、猶、修飾語はそのいづれの語を修飾してゐるかを説明せよ。

(一)其の間に、毛利の大軍がやつて來た。
(二)廣い野原で牛が鳴く。
(三)其の後老王はコーデリヤの孝養によつて餘生を安樂に送つた。
(四)春は若草山の芝綠にもえたち、三月堂・二月堂霞につゝまれてさながら夢の如し。（文語）

文の成分の位置と省略

正序法
(一)主—述
(二)主—客—述
(三)修—主—修—客—修—述
(四)獨立語

(五)健全なる精神は、健全なる身體に宿る。されば人は健康に注意せざるべからず。（文語）

第二章　文の成分の位置と省略

一　正序法

一　雨が（主）降り出した（述）。
二　猫（主）鼠を（客）捕へたり（述）。（文語）
三　隣家の（主ノ修）猫（主）大きなる（客ノ修）鼠を（客）巧に（述ノ修）捕へたり（述）。（文語）

右の文は成文の位置の普通なものである。これを**正序法**といふ。そして主語は述語の前、修飾語は被修飾語の上に來るのが普通である。

四　彼は身體が弱い。併し勉強家だ。

太郎君、早く來給へ。

あゝ悲しいかな。（文語）

右のやうに獨立語は文の始におかれるのが普通である。

二　倒序法

倒序法

一　たれ（述）ですか君（主）は。

二　雲（述ノ修）のいづこに月（主）やどるらむ（述）。（文語）

右は文の語調を整へ、或は語勢を強めるために、文の成分の位置を替へたものである。これを**倒序法**といふ。

三　省略法

省略法

一　君も（それを）讀みましたか。

二　（諸子は）人を相手にせず、天を相手にせよ。（文語）

三　彼は末賴もしき少年にこそ（あれ）。（文語）

右の（一）は客語（二）は主語（三）は述語の省略されたものである。かやうに文は、冗長を避け文意を強める爲に、其の成分を省略することがある。これを**省略法**といふ。

練習二一

練　習

左の文中にある倒序法・省略法について説明せよ。

（一）さあ、どうぞこちらへ。

（二）賴むよ、この間の事。

（三）面白かつたね、昨日の野球は。

（四）先づ健康。

（五）揚げよ日の丸。

（六）祝へ諸人もろともに。（文語）

（七）失禮の段御許し下されたく候。（文語）

第三章　句

一　山が美しいのは日本アルプスである。
二　あゝして雪の積つてゐるのは花が咲いたやうだ。
三　あそこに松の生ひ茂つた岡がある。
四　茶摘女が聲もさわやかに歌つてゐる。
五　雨が降つたので運動會は中止された。
六　陸軍は奉天で勝ち、海軍は日本海で勝つた。

右の例の傍線の引いてある部分は、何れも文が他の文の一成分となつたものである。これを**句**といふ。

一の句のやうに主語の働をするものを**主語句**といひ、
二の句のやうに述語の働をするものを**述語句**といひ、
三の句のやうに形容詞的修飾語の働をするものを**形容詞句**といひ、

句
主語句
述語句
形容詞句

四・五の句のやうに副詞的修飾語の働をするものを**副詞句**といひ、
六の句のやうに對等に結びつくものを**並立句**といふ。

副詞句
並立句

練習二二

左の文中の句を指摘し、その種類を言へ。

(一)　僕は君の來るのを待つてゐた。
(二)　私の好きな秋が來た。
(三)　無理が通れば道理が引込む。
(四)　前車の覆るは後車の戒なり。（文語）
(五)　水は方圓の器に從ひ、人は善惡の友による。（文語）

第四章　文の構造上の種類

文は構造上から左の三種に分類することがある。

構造上の種類

單文

一　單文

一　鳥が　啼く。

二　われ　花を吉野に　探る。（文語）

右の例のやうに主語と述語との關係が唯一回成立してゐる文を**單文**といふ。

複文

二　複文

一　日の入るのが（主語句）早くなつた。

二　名も無い（形容詞句）草が咲いてゐる。

三　春は來れども（副詞句）鶯鳴かず。（文語）

右の例のやうに並立句以外の句を一つ以上含み、主語と述語との關係が二回以上成立してゐる文を**複文**といふ。

重文

三　重文

一　兄は政治家になり、弟は科學者になつた。

二　病は口より入り、禍は口より出づ。（文語）

右の例のやうに並立句が相寄つて文をなすものを**重文**といふ。

性質上の種類

第五章　文の性質上の種類

文は性質上から左の四種に分類することが出來る。

一　平敍文

一　飛行機は早い。

二　雨降り風吹く。（文語）

右の例のやうに、單に事實をありのまゝに敍述する文を**平敍文**といふ。

二　疑問文

一　これは何といふ花ですか。

二　精神一到何事か成らざらむ。（文語）

右の例のやうに、疑問或は反語の意を表はす文を**疑問文**といふ。

三　命令文

一　家の事は心配するな。

二　健康に注意せらるべし。（文語）

右の例のやうに命令の意を表はす文を**命令文**といふ。命令文には普通主語が省略される。

四　感動文

一　もうそんなになるのかなあ、卒業してから。

二　忠なるかな、楠氏。（文語）

右の例のやうに、感動の意を表はす文を**感動文**といふ。感動文には主成文の完備しないことが多く、又成分の倒置せられることが多い。

練習二三

練習

次の文は構造上及び性質上どんな種類に屬するか。

(一)　用があつたら、手を鳴らします。

(二)　雪の降る夜はほんたうに靜かだ。

(三)　尼子重代の敵毛利を、せめて其の片われの元春を、おのれ其のまゝにして置けようか。

(四)　御身は、何とて此の金のあることを今日まで我に語らざりしぞ。（文語）

(五)　皇國の興廢此の一戰にあり。各員一層奮勵努力せよ。（文語）

（別記）

書簡體と敬語

禮儀といふものは、其の性質上古いしきたりを傳へるものが多い。文章の中で、最も禮儀に留意せられる性質のものは手紙文である。從つて手紙文には特に古い時代の言葉遣が遺されて來るのは當然である。勿論現代の手紙文には、所謂口語文を用ひたもの、或は口語文といふよりも、むしろ日常の會話其の儘の言葉遣を用ひたものも少くはないが、又一面傳統を重んずる社會に、或は儀禮を必要とする場合に、古い形式を保つた文體が用ひられる。

拜啓、久しく御無音に打過ぎ失禮仕候さて昨日御地より歸村せられたる河井氏の御話によれば貴兄には去月以來御病氣にてしかも一時は大分御重態なりし由誠に意外の事に驚入候しかし此の頃は餘程御快方に向はれ候とか何とぞ十分御養生ありて一日も早く御全快なされ候樣切に祈り申候

右の例のやうな文體を**候文**といひ、文語の一種ではあるが、著しく敬語が用ひられる。

書簡體特に候文に多く用ひられる敬語

一　名詞・數詞・代名詞

（一）尊他の意を表はす語。（尊臺・貴官・貴兄・御尊父・御母堂・御兄君・御令弟・貴友・御社員・御當人・御使用人・御三人・御地・御鄕里・貴堂・貴店・御校・御社・貴館・御無事・御清榮・御勇健・貴書・御懇書・芳墨・美果・佳肴・御盛宴・御說・貴意・御高見・御申越・御賢察・御芳

情御寛恕・御入來・御光來・御來社・御來觀・御臨場・御受取・御入手・御笑納・御一覽等）

（二）謙讓の意を表はす語。（私事・私儀・小生・不肖・小官・手前・老父・愚妻・愚息・豚兒・小妹・鄙地・拙宅・弊家・小店・弊館・小校・寸楮・短簡・弊信・粗品・粗果・小宴・粗餐・小見・愚見・卑見・微意・寸志・御伺・參上・拜趨・拜眉・入手・受領・頂戴・拜送等）

（三）その他候文には文初に拜啓・拜呈・謹啓・謹呈・恭啓・肅啓・拜復・拜答・復啓・謹答・再啓等の語を置き、文末に敬白・敬具・謹白等の語を置く慣例がある。

二　動詞・助動詞

（一）尊他の意を表はす動詞。（遊ばさる。おはします。思し召す。仰す。下さる。賜はる。なさる。等）

又、これらの語を動詞の連用形又は漢語に添へて尊敬の意を表はす。（如何御凌ぎ遊ばされ候や。御賢察下されたく候。）

（二）謙讓の意を表はす動詞。（上ぐ。致す。存ず。仕る。參らす。罷り存り。伺ふ。承はる。奉る。申す。申しあぐ。等）

又、これらの語を動詞の連用形又は漢語に添へて謙讓の意を表はす。（御祝ひ申しあげ候。早速參上仕るべく候。）

（三）尊他の意を表はす助動詞。（る。らる。す。さす。しむ。）

三　形容詞・副詞

（一）接頭語「御」を伴ひ尊他の意を表はす形容詞・副詞。（御美しき花。御麗はしくあらせられ。等）

（二）接頭語「御」を伴ひ尊他の意を表はす副詞。（御立派に御成長遊ばされ候。御心御靜に御持下され度候。等）

「候（ふ）」は候文に用ひられる敬語中最も代表的なもので、同時に其の用法が複雜である。

候の活用

活用形 / 原形	未然	連用	終止	連體	已然	命令	備考
候（ふ）	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ	終止・連體の場合、語尾「ふ」の書記を略して用ひる。終止のまゝ過去・完了にも用ひる。

候の用法

口語	候	口語	候
ます・まする・です をります・ゐます	候 居候・罷在候（まかりあり）	ございません（ぬ） ませんでした	御座なく候 ず候・ず候ひき

口語	候	口語	候
あります ございます ました ません・ませぬ ありません（ぬ） ませうとも ですが・ではございませうが ましたが・ましたけれども	候・有之候 御座候 候ひき・候 ず候・候はず 無之候 候とも 候へ共	ますなら・ませうなら ますから・ますので ましたから しません（ぬ）・しませんでした いたしませう	候はゞ 候へば・候間・候に付・候故・候まま・候條 候へば・候故・候により 致さず候・仕らず候 可致候（いたすべく候）
候へ共・候ひしも 候か・候や 候はん・べく候 由に候・趣に候 候由・候趣 候處・候ひしも		伺ひますと 如何ですか どうしたのですか・どうしましたやら 言ひます・申します 上げます・差上げます	可仕候（つかまつるべく候） 承り候へば 如何に（御座）候や 如何致候にや 申候・申上候・申進め候・申述候 差上候

したいのです・したいと思ひます	致度候・仕度候	願ひます・お願ひします	願候・相願候・願上候
しました・いたしました	致候・仕候	御願申します	御願申上候
覺えます・覺えました	覺え申候・覺え候・覺上候	ください	被下度候
思ひます・存じます	思ひ候・存候・存上候・奉存候	下さいませ(し)	可被下候（下さるべく候）
思ひますが	存候へ共	出ます・行きます	罷出候
なります・なりました	相成申候・相成候	出ませう	罷出づべく候
なさい(れ)ました	被成候・被遊候	上りませう	參上可致候（致すべく候）
なりますまい・なりませんでせう	相成るまじく候	參上致しませう	參上可仕候（仕るべく候）
なるでせう・なるだらうと思ひます	可相成候（あひなるべく候） 相成可申候（あひなり申すべく候）	ではありませんか	に候はずや

新制

實業國文法

終

附錄　文法上許容ニ關スル事項

一　「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ。

二　「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

三　過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ。

例　火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎮火セザリシ。
　　金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

四　「コトナリ」（異）ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ。

五　「ヽヽセサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　手習サス。
　　周旋サス。
　　賣買サス。

六　「ヽヽセラル」トイフベキ場合ニ「ヽヽサル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ

妨ナシ。

例　罪サル。

評サル。

解釋サル。

七　「得シム」トイフベキ如合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ。

例　最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク各其ノ地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八　佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドスルモ妨ナシ。

例　唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻擊開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九　てにをはノ「ノ」ハ動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例　花ヲ見ルノ記。

學齡兒ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

一〇　疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例　有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

一一　てにをはノ「トモ」ノ動詞・使役ノ助動詞及ビ受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラルルトモ。

强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

一二　てにをはノ「ト」ノ動詞・使役ノ助動詞・受身ノ助動詞及ビ時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラルルト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。
萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ。

一三　語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ニ誤謬ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例　月ト花。
宗教ト道德ノ關係。
京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。
最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。
史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。
史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

一四　上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにはをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例　誰ニヤ問ハン。
幾何ナルヤ。
如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五　てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ。

例　何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。
期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。
經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。
誤解ヲ生ズベキ例。
請願書ハ會議ニ付スルモ(スルトモ)之ヲ朗讀セズ。
給金ハ低キモ(クトモ)(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六　「トイフ」「トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　イハユル哺乳獸ナルモノ。
顏回ナルモノアリ。

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承諾セラルルモノハ德川時代國學者ノ研究ニ基キ、專ラ、中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ。然レドモ、之ニノミ依リテ、今日ノ普通文ヲ律センハ、言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ、コレマデ、破格又ハ、誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其ノ用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ。故ニ文部省ニ於テハ、從來、破格、又ハ、誤謬ト稱セラレタルモノノ中、慣用最モ弘キモノ數件ヲ擧ゲ、之ヲ許容シテ、在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ、其ノ許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ、同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ。依リテ、自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニ之ヲ應用セントス。

（明治三十八年十二月二日　文部省告示第百五十八號）

〔第二表〕

口語形容詞活用表

語幹		活用形
清	副詞	ク
涼シ	終止	イ
	連體	イ
	假定	ケレ

文語形容詞活用表

活用の種類	語幹	活用形 副詞	終止	連體	已然
シク活用	涼	シク	シ	シキ	シケレ
ク活用	清	ク	シ	キ	ケレ

ナ行變格	ラ行變格
死	有
ナ	ラ
ニ	リ
ヌ	リ
ヌル	ル
ヌレ	レ
ネ	レ

〔第二表〕

口語形容詞活用表

語幹	活用形	
清	副詞	ク
涼シ	終止	イ
	連體	イ
	假定	ケレ

〔第一表〕

文語動詞活用表

活用の種類	語幹	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	書	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ
上二段	起	キ	キ	クル	クル	クレ	キヨ
上一段	〔著〕	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ
下二段	兼	ネ	ネ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネヨ
下一段	〔蹴〕	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ
カ行變格	〔來〕	コ	キ	クル	クル	クレ	コヨ
サ行變格	〔爲〕	セ	シ	スル	スル	スレ	セヨ
ナ行變格	死	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
ラ行變格	有	ラ	リ	リ	ル	レ	レ

口語動詞活用表

活用の種類	語幹	活用形 未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段	書	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ
	死	ナ	ニ	ヌ	ヌ	ネ	ネ
	有	ラ	リ	ル	ル	レ	レ
上一段	起	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ(ロ)
	〔著〕	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ(ロ)
下一段	兼	ネ	ネ	ネル	ネル	ネレ	ネヨ(ロ)
	〔蹴〕	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ(ロ)
カ行變格	〔來〕	コ	キ	クル	クル	クレ	コイ
サ行變格	〔爲〕	セ シ	シ	スル	スル	スレ	セヨ シロ

〔第一表〕

口語動詞活用表

活用の種類	語幹	活用形 未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段	書	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ
	死	ナ	ニ	ヌ	ヌ	ネ	ネ
	有	ラ	リ	ル	ル	レ	レ
上一段	起	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ(ロ)
	著	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ(ロ)
下一段	兼	ネ	ネ	ネル	ネル	ネレ	ネヨ(ロ)
	蹴	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ(ロ)
カ行變格	來	コ	キ	クル	クル	クレ	コイ
サ行變格	爲	セ	シ	スル	スル	スレ	セヨ シロ

文語動詞活用表

活用の種類	語幹	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	書	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ
上二段	起	キ	キ	ク	クル	クレ	キヨ
上一段	著	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ
下二段	兼	ネ	ネ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネヨ
下一段	蹴	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ
カ行變格	來	コ	キ	ク	クル	クレ	コヨ
サ行變格	爲	セ	シ	ス	スル	スレ	セヨ
ナ行變格	死	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
ラ行變格	有	ラ	リ	リ	ル	レ	レ

〔第二表〕

口語形容詞活用表

語幹	活用形 副詞	終止	連體	假定
清	ク	イ	イ	ケレ
涼シ	ク	イ	イ	ケレ

文語形容詞活用表

活用の種類	語幹	活用形 副詞	終止	連體	已然
ク活用	清	ク	シ	キ	ケレ
シク活用	涼	シク	シ	シキ	シケレ

	時	
	未來	過去
う	ようう	た
○	○ ○	たら
○	○ ○	○
う	ようう	た
う	ようう	た
○	○ ○	たら
○	○ ○	○
ム	ム	ケリ キ
○	○	○ (ケラ)
○	○	○ (ケリ)
	ム	ケリ キ
	ム	ケル シ
	メ	ケレ シカ
○	○	○ ○

〔第三表〕

助動詞活用表

（）内ノ活用形ハ殆ンド用ヒレラナイ

種類		受身	可能	使役	尊敬	時 助勢（完了）	時 過去	時 未來	推
口語	形原	れる られる	れる られる	せる させる	れる られる ます	た	た	う よう	う よう らしい らしかる
	然未	れ られ	れ られ	せ させ	れ られ ませ せ	たら	たら	○○	○○○○ さう
	用連（詞副）	れ られ	れ られ	せ させ	れ られ まし せ	○	○	○○	○○ らしく らしかつ さう
	止終	れる られる	れる られる る	せる させる る	れる られる ます する る	た	た	う よう う	○ らしい う
	體連	れる られる る	れる られる る	せる させる る	れる られる ます する る	た	た	う よう う	○ らしい う
	定假	れ られ れ	れ られ れ	せ させ れ	れ られ ます すれ れ	たら	たら	○○	○○○○ さう
	令命	れ られ ろよ	○○	せ させ ろよ	○○ ませ せ	○	○	○○	○○○○○
文語	形原	ル ラル	ルベラル カリシル	ス サス ム ス	ルラルル サスス ムスル	ツヌタリ タリ	キケ リ	ム	ムラムケ ムラムベ シ
	然未	レ ラ レ	レラレ カ○ ラ レ	セ サセ メ セ	レラレセ サセ ムセ メ レ	テナタ （ラ） ラ	○ （ケ ラ）	○	○○○○○
	用連（詞副）	レ ラ レ	レラレ ベベラ カリクレ	セ サセ メ セ	レラレセ サセ ムセ メ レ	テニタ （リ） リ	○ （ケ リ）	○	○○○ ベ ク
	止終	ル ラル	（ベベラル カリシル）	ス サス ム ス	ルラルス サスル ムスル	ツヌタリ タリ リ	キ ケ リ	ム	ムラムケ ムラムベ シ
	體連	ル ラル ル	（ベベラル カル ルキルル）	ス サス ム スル ル	ルラルス サスル ムスル ルル ル	ツヌタ ルタ ルル ル	シ ケ ル	ム	ムラムケ ムラムベ シキ
	然已	ル ラル レ	（ベベラル カケル ルレレレ）	ス サス ム スレ レ	ルラルス サスル ムスレ レル レ	ツヌタ （レ） レ レ	シ ケ レ カ	メ	メラメケ ベ ケレ メ
	令命	レ ラレ ヨ	○○○○	セ サセ メ セ ヨ	レラレセ サセ メセ ヨ ヨ	テネ ○ （レ） ヨ	○○	○	○○○○○

〔第三表〕

嘆咏	希望	比況	指定	打消	推量	時			敬崇	使役	能
						未來	過去	完了			
	たい(たかる)	やうだ(やうです)	だ(です)	ぬ(ん)(なかる)ない(まい)	う(よう)らしい(らしかる)だ(です)(さうだ)(さうです)	う(よう)	た	た	れる(られる)ます	せる(させる)	られる
	○(たから)	やうだ(やうでせ)	だ(でせ)	○(なから)○	○○○○(さうだ)(さうでせ)	○○	たら	たら	れ(られ)ませ(られ)	せ(させ)	られ
	たく(たかつ)	やうだつ(やうでし)(やうでつ)(やうにで)	だつ(でし)	ず(なかつ)なく	○○らしく(らしかつ)(さうだつ)(さうにでつ)(さうでし)	○○	○	○	れ(られ)ませ(られ)し	せ(させ)	られ
	たい(○)	やうだ(やうです)	だ(です)	ぬ(ん)ない(○)(まい)	○らしい(さうだ)(さうです)	う(よう)	た	た	れる(られる)ます(させる)	せる(させる)	られる
	たい(○)	やうな(○)	○(○)	ぬ(ん)ない(○)(まい)	○らしい(さうな)	う(よう)	た	た	れる(られる)ます(させる)	せる(させる)	られる
	たけれ(○)	やうなら(○)	なら(○)	ね(なけれ)(○○)	○○○○(さうなら)	○○	たら	たら	れれれ(られれ)ます(させれ)	せれ(させれ)	られれ
	○○	○○	○○	○○○○	○○○○○○	○○	○	○	○○(ませ)(ませし)	せよろ(させろ)せよろ(させろ)	○
ケリ	ナリ	タシ(タカリ)	ゴトシ	ズ(ザリ)ジ(マジ)	ムラムケムラシベシメリ(マシ)	ム	キ(ケリ)	ツ(タヌリ)	ルラルサスシ(ムス)	スサス(シムス)	ベラシ(ベカリ)
○○	○(タカラ)	○	ナラ(タラ)	○○○	○○○○○○○	○	○(ケラ)	テナ(ラ)タラ	レラレセサシ(メセ)	セサセ(シメセ)	ベラレ(ベカラ)
○○	タク(タカリ)	ゴトク	ナリ(タリ)	ズ(ザリ)○(マジク)	○ベクラシベ○○○(メリ)(メリ)(マシ)	○	○(ケリ)	テニ(リ)タリ	レラレセサシ(メセ)	セサセ(シメセ)	ベラレ(ベカリ)
ケリ	ナリ	タシ(タカリ)	ゴトシ	ズ○ジ(マジ)	ムラムケムラシベシケラ(マシ)(メリ)(メリ)	ム	キ(ケリ)	ツヌタ(リ)リ	ルラルススス(ムス)	スサス(シムス)	ベラシ(ベカリ)
ケル	ナル	タキ(タカル)	ゴトキ	ヌ(ザル)ジ(マジキ)	ムラムケムラシベキ(ラシキ)(ラシ)(マシ)	ム	シ(ケル)	ツルヌタ(ル)ル	ルラルススス(ムル)	スサス(シムル)	ベラル(ベカル)
ケレ	ナレ	タケレ(タカレ)	○	ネ(ザレ)ジ(マジケレ)	メラムケムラメベケレ(ラシ)(メレ)(マシカ)	メ	シ(ケレ)カ	ツレ(レ)タヌレ	ルラルススス(ムレ)	スサス(シムレ)	ベラル(ベカル)
○○	○○	○	ナレ(タレ)	○○○	○○○○○○○	○	○○	テネ(レ)○	レラレセサシ(メヨ)	セサセ(シメヨ)	○○○

昭和十三年五月二十日印刷
昭和十三年五月三十日發行
昭和十三年八月十七日訂正再版印刷
昭和十三年八月二十五日訂正再版發行

新制實業國文法
定價金五拾五錢

編者　吉澤義則

發行者　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
代表者　山本慶治

印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目二十三番地
合名會社　交進社印刷所
代表社員　余部留吉

發行所　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號　一一七五二二

（略名）修文書淨舊文法

日本出版配給株式會社　元給配
東京市神田區淡路町2ノ9

三A

大崎慶

広島大学図書
2000073167